

2019 年 8 月 18 日（日）「注がれた愛」

マタイ 26:1-13

1 イエスは、これらの話をすべて終えると、弟子たちに言われた。2 「あなたがたの知っているとおりに、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」 3 そのころ、祭司長、民の長老たちは、カヤパという大祭司の家の庭に集まり、4 イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。5 しかし、彼らは、「祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから」と話していた。

6 さて、イエスがベタニヤで、ツアラアトに冒された人シモンのおられると、7 ひとりの女がたいへん高価な香油の入った石膏のつぼを持ってみもとに来て、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。8 弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんなむだなことをするのか。9 この香油なら、高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」 10 するとイエスはこれを知って、彼らに言われた。「なぜ、この女を困らせるのです。わたしに対してりっぱなことをしてくれたのです。11 貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。12 この女が、この香油をわたしのからだに注いだのは、わたしの埋葬の用意をしてくれたのです。13 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」

【序論】

前回まで、マタイ 24～25 章の、主イエスの終末的な教えを学んできました。長い教えでしたが、それも終わり、今日からいよいよ本福音書の最終段階に入ります。何度かお伝えしてきておりますように、マタイ福音書は五つの主イエスの教えを軸に構成されていて、その教えが言わば語り尽くされた訳です。言い方を変えますと、主の教えに応答すべき時が満ちたということになるでしょう。主は当時の聴衆にも、現代の読者にも応答を求めてこられました。そして、ついに受難の段階に入ります。実は、この受難がなければ、誰も御言葉に応答することはできないのです（受難と復活を経て弟子たちの目が開かれていく）。弟子たちの霊も未だ閉ざされた状態にある。私たちも、ここから学んでいく十字架の場面を通して、自分が神の愛に応え得る者とされることを求めたいのです。主の十字架の客観的な意味を知り、それによって感情が揺さぶられ、意志をもって主を愛する。しかしながら、その応答的愛を先取りした人物がいました。今日は一人の女性がクローズアップされます。

【本論】

今日の箇所は大きく二つに分けられるでしょう。第一に「受難予告と陰謀」(1-5 節)、第二に「注がれた愛」(6-13 節) と、見事なコントラストになっています。

本論 A. 受難予告と陰謀

イエスは、これらの話をすべて終えると、弟子たちに言われた。「あなたがたの知っているとおり、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」(26:1-2)

時は過越の祭の直前。それが二日後に迫っている忙しい時期です。過越の祭というのはユダヤの三大祭の一つで、イスラエルがかつてエジプトから贖われたことを記念する祭です。「過越し」という言葉の由来は、神がイスラエルを救うために 10 の災いをエジプトに下された最後の御業として、エジプトのすべての初子が討たれたとき、家の門柱と鴨居に小羊の血を塗ったイスラエルの全家は、その災いを免れたというところにあります。神の使いは小羊の血を見て通り過ぎた。だから、神の怒り（審き）が通り過ぎることを「過越し」と呼ぶのです。その出来事を経て、イスラエルは大急ぎで準備をしてエジプトを出たのですが、その際、パン粉を膨らませている暇がなかったので、種入れぬパンを用意し、早急に出発したのです。そのこともまた、過越の祭で覚え、「徐酔祭」として祝われました。徐酔祭の最初の日が過越の食事が行なわれる日と一致していたのです。ニサンの月の 14 日の夕暮れに小羊を屠り、過越の祭がスタートしました。

主イエスは弟子たちに改めてご自分の受難を予告されます。これまでに三度に亘って予告がありましたが(16:21、17:22-23、20:18-19¹)、いよいよ大詰め、最後の予告となる。このように、繰り返し告げてきたところには、弟子たちに対する配慮があったでしょう。心を備えてその日を迎えることができるように。また、この受難が最初から分かっていたことであり、主が世に来られた目的にほかならず、単なる「犯罪者の処刑」という出来事ではないことを示すためでもある。父なる神様の御旨に従い、その道を自らの意志で選び取っていく主の姿があります。殺されると分かっているなら、逃げるといふ道もあるでしょう。しかし、主は敢然と十字架に向かって進んで行かれるのです。

そのころ、祭司長、民の長老たちは、カヤパという大祭司の家の庭に集まり、イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。しかし、彼らは、「祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから」と話していた。(26:3-5)

¹ その他、受難を暗示する箇所として 9:15、10:38、12:40 も参照。

ここでは、ユダヤ教最高議会の一部のメンバーによる、非公式なミーティングがもうけられています。本来、サンヘドリンは 71 名で構成されていますが、大祭司の家に集まれる程度であれば、もっと小規模だったことでしょう。「祭司長、民の長老」という表現も、「律法学者」が含まれておりませんので、全員ではないことが暗示されています。サンヘドリンの中には、必ずしもイエス殺害計画に賛同していない人がいたと思われます。そういう反対意見の者を除外しての密会ということになりましょう。「だまして」(δόλος)という言葉が使われていますが、これは「巧妙に」という意味で、つまりイエスを罠にかけて捕えようという相談をしているのです。隠れて計略を練るところに、既に彼らの心の闇が見えます。エゼキエルは、聖所の中枢部まで偶像礼拝に毒されているイスラエル宗教の惨状を嘆きましたが(エゼキエル 8:10～)、ここでも法に適わぬことが行なわれようとしている。

彼らの当初の思惑としては、イエスを暗殺しようと考えていたと思われます。あの影響力の測り知れない男を人目につかないところで闇に葬り去ろう。「祭の間」を避けるのは、過越の祭の巡礼に多くの人エルサレムに集まるからです。推定 200 万人という報告もありますが、今昇り竜のように民衆の期待を集めているイエスを殺したとあつては、取り返しのつかない暴動が起きるかも知れない。しかし、イエスを捕えるチャンスは、この過越の祭の期間に限定されている。祭が終わったらイエスはエルサレムを去ってしまうだろう。だから、彼らの計画としては、何とかして祭の間に捕え、祭が終わって町が静まった時に殺したかったのです。ところが、事態は思わぬ方向へと進んでいくことになる。ユダの裏切りによって、主イエスは難なく捕えられてしまうのです。更に、彼らが計画していた暗殺とは程遠い、公なる十字架刑によって主イエスは殺されることになる。この処刑は白日の下、それもローマ人をも抱き込んだ「全世界」の目に晒されるものとなるのです。神はこのようにして人間の罪を完全に公表される。そして、主の十字架がすべての人の罪のためであることが示されるのです。

本論 B. 注がれた愛(埋葬と即位)

さて、イエスがベタニヤで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられると、ひとりの女がたいへん高価な香油の入った石膏のつぼを持ってみもとに来て、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。(26:6-7)

主イエスと弟子たちは、エルサレム滞在中、ベタニヤという地を拠点に活動していたようです。ベタニヤというのは、エルサレムからおおよそ 3 キロメートルのところにあった町で、そこには親しい友が多くいました(ルカ 10:38-42、ヨハネ 11:1-2、12:1-2)。「ツ

「アラアトに冒された人シモン」というのは、恐らく主イエスによって重い皮膚病が癒された人で、その奇跡が語り継がれていたため、その後もこのように呼ばれ続けていたのでしょう。主イエス一行にとって、シモンの家は宿泊場所で、ホッと一息つけるところだったと思われます。

さて、シモンの家で食事をしていたとき、一人の女性が主の許にやってきて、高価な香油を注ぎかけました。このことをした女性は、ヨハネによれば、ラザロとマルタの姉妹のマリヤであったと記されています（ヨハネ 12:3）²。彼女は何のためにこんなことをしたのか。このマリヤという女性の特徴をよく描いている記事があります。姉のマルタが一生懸命給仕をしているときに、妹のマリヤは主イエスの足元で話に聞き入っていたという出来事がルカ 10:38-42 に描かれている。共同体の生活には「マルタ」も欠かせないのですが、マリヤには主の言葉を一言も漏らさず聞きたいという願望があった。

「聖なる願望」と言ってもよいでしょう。今しか聞くことのできない主の御声という感覚があったのです。今この時を逃してはならないという、彼女の直感のようなものが働いていた。今回も、十字架を目前にした主イエスから、何かただならぬ雰囲気を感じ取っていたのでしょう。

このような鋭い霊的直感をもつ人というのは、現実には確かに存在します。話は違いますが、私が過去にアルバイト先で大きなトラブルに巻き込まれたとき、一人の友人がなぜか分かりませんが、バイクで迎えに来ていました。どうして来てくれたのかと尋ねると、ただ胸騒ぎがしたと言うのです。彼は私の危機のとき、友となってくれました。

マリヤが主の頭に注いだ香油は、マルコ 14:3 によると「ナルド」という名称であったことが分かります。これは別名「スパイクナード」と言って、「ヒマラヤの高山に生えるオミナエシ科の多年草からとれる精油」です。実は、以前にマルコ福音書の講解をしていた際に、一体どんな香りなのか気になって、少量を購入しました。今日も皆様に是非嗅いでいただきたく、持ってまいりました。現代の様々な香水とは随分雰囲気が違うことが分かるでしょう。当時は大変な贅沢品で、特に死体に塗るために用いられることが多かったそうです。マリヤにとっては紛れもない宝物であり、この後の弟子たちの評価からも分かるように、300 デナリ（現代の日本円にして 300 万円相当？）の価値があったようであります。彼女が嫁入り道具として大切に取っておいた物かも知れません。それを惜しみなく主イエスの頭から足にかけて注ぎかけたというのです。彼女にとって、今この時にしかできない、最大限の主イエスへの愛の表現だったのでしょう。ところが、彼女の行為はすべての人に受け入れられるものとはなりません。意外にも、主の弟子たちから批判の声が挙がったのです。

² ルカ 7:36-39 にも似た記事が記録されていますが、恐らく別物でしょう。

弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんなむだなことをするのか。この香油なら、高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」(26:8-9)

マリヤの愛の行為は、弟子たちの目には「無駄」に映ったのです。彼らは節約主義から物事を判断した。確かに、過越の祭の期間というのは、貧しい人々に施しがなされる重要な機会だったようです。一年分近くの賃金に交換できるのであれば、相当数の人がそれによって養われたかも知れません。そんなことを瞬時に思いついたのは、第一にイスカリオテのユダであったと、ヨハネは報告している(ヨハネ 12:4-5)。しかも、ヨハネは「しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心に掛けていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである」(ヨハネ 12:6) という説明まで加えています。恐らく、他の弟子たちも同調したのは間違いなかったのでしょうし、あるいは誰もユダの言うことを咎めなかったことが、彼の意見への無言の同意と受け取られたのかも知れません。いずれにせよ、彼らの目にマリヤの行為は「無駄」と映ったのです。

私たちは、もし自分の身内があと数日で亡くなるという状況になったなら、どんなことでもしてあげたいと思うのではないのでしょうか。その人が願うことは何でも叶えてあげられるように努めると思います。しかし、弟子たちには主の十字架のリアリティがあまりなかった(あるいは信じたくなかった)のかも知れません。主が言ってこられたことを現実として受け留められていなかった可能性がある。しかし、マリヤは持ち前の霊的直感で、主の最期の時を悟ったのです。そして、死にゆく主イエスに愛を注げるタイミングは今しかないと判断したのでした。

するとイエスはこれを知って、彼らに言われた。「なぜ、この女を困らせるのです。わたしに対してりっぱなことをしてくれたのです。貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。この女が、この香油をわたしのからだに注いだのは、わたしの埋葬の用意をしてくれたのです。まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」(26:10-13)

私は一読者として思うのです。このフォローの言葉は、本来他の弟子たちの口から出るべきだったのではないかと。主イエスご自身がマリヤをフォローする形になってしまった。主は彼女の愛を真っ正面から受け留めました。一滴たりとも逃すまいとして、彼女の愛を受け取ったのです。貧しい人を施すべきだという弟子たちの意見は正論であり、間違っていない。しかし、主イエスへの最大限の献身は機を逃すことができない事柄だったのです。この時は、愛が正論を打ち破った。マリヤと主イエスとの間の一対一の愛の関係がそこにあったのです。

主イエスは、彼女の油注ぎを解釈しておられます。そこには「埋葬」の意味があるのだと。主はご自分が犯罪人として、呪いの十字架で殺されることをよく認識しておられました。そのようにして殺された人は、通常埋葬されることなく、野ざらしにされ、猛禽や獣の食い荒らすに任されます。そのように、世に捨てられ、葬られることのない自分をマリヤは事前に葬ってくれたのだと。彼女の中にはそこまでの意識はなかったかも知れません。しかし、主は彼女の行為をそのように捉えたのです。

マリヤの香油注ぎには、更にもう一つの意味がありました。それは、王としての即位という意味です。この誰の目にもつかぬ「シモンの家」で、主は神の国の王として即位なさった。その即位は十字架上で極まるのですが、マリヤの行為には、内々で行なわれた「事前の即位式」の意味合いも含まれていたのです。サムエルがダビデに個人的に油を注いだ記事が思い起こされます（Ⅰサムエル 16:13）。「**世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう**」という、やや理解しにくい言葉が残されていますが、これは主イエスの王としての即位が福音宣教と密接な関わりがあることを表しているでしょう。神の国の王、油注がれた方が来られたことを世に宣べ伝えていくということです。

【結論】

今日は、受難に先立つ、一人の女性の愛と献身を見ました。愛とは、与えるに逃せない時があり、受けるに逃せない時があります。そして、愛とはこの世の打算を超えた真理をもつものでもある。普通の人目に「300 デナリ」の値打ちに映るものが、主イエスにとっては無限の価値をもっていたのです。主は愛を知っておられました。なぜなら、ご自身が愛であるからです（Ⅰヨハネ 4:8）。そして、主イエスこそが「聖なる無駄」とも言える愛を私たちに示してくださいました。ご自分のいのちを捨てることによって。主イエスを知ることは愛を知ることである。そして、自分も愛に生きることであり。愛は律法を超え、人の常識を超え、無制限に与えるものとして現れるのです。

【祈り】

愛なる神様。マリヤは愛を知っていました。言い換えるならば、主イエスを知っていたのです。そして、主イエスがどのような愛を注ごうとしているか、それをいつ受け、いつ愛を注ぎ返すべきかも理解していました。主よ、私たちにもそのような霊的感性と、あなたを愛する心をお与えください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、

ひとり子を世に遣わし、人類への愛を惜しみなく注ぎ給うた、父なる神の愛。

無駄とも思えるマリヤの行為を受け留め、無限の価値を見出し給うた、主イエス・キリストの恵み。

主の愛に応え、愛し返すときを示し給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。